

詩篇 90 篇 12 節 「自分の日を数える」

1A とこしえの住まい

1B エデンの園と追放

2B 永遠の思い

1C 被造物の中

2C 死後の裁き

2A 今だけの事を思う愚かさ

1B 金持ちの譬え

2B ベルシャツアル

3A 永遠のための投資

1B 不正の管理人

2B 将来の報い

3B 神だけの計画

本文

聖書通読の学びは 89 篇まで来て、今日は 90 篇から 94 篇までを午後に学びます。詩篇 90 篇 12 節を読みます。「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」

私たちは、「時間」というのが物理的には均等に並んでいることをもちろん知っていますが、実感としては伸び縮みしていることはよく知っています。「あっという間に過ぎてしまった」という時もあるし、「この数秒が何年にも感じた」という表現もあります。歳を経るごとに、時間が過ぎるのが早いとよく言われますが、しかし、実は若い人は若いなりに、これまで生きてきた人生の中で自分に与えられている瞬間を生きていますね。そこで、「はたして自分は与えられている時間を正しく過ごしているだろうか」という問いかけをしていると思います。

1A とこしえの住まい

この祈りを書き記したのは、モーセです。彼は、イスラエルの民を荒野の旅で神の導かれる所に導いた指導者でした。四十歳にしてエジプトを出て、八十歳でエジプトに戻り、民がそこから脱出できるようにして、荒野で四十年間、彼らの放浪を付き合いました。そして死んだのは百二十歳です。

私たちから見ると長寿であると思いますが、彼は一節で、「主よ。あなたは代々にわたって私たちの住まいです。」と言いました。永遠に比べると、その命は実に短く、はかないものでした。しかも、イスラエルの民は罪を犯し、多くが死んでしまいました。そして、四十年間の荒野の旅で、そこを放浪することによって一つの世代が死んでいくのを見るのは、さぞかし辛かったことでしょう。永

遠に生きておられる神と共に生きることを望む者としては、人々が死んでいくのを見るのは苛酷であり、神の罪に対する怒りを感じていたのだと思います。

1B エデンの園と追放

確かに、人の死を受け入れることは辛いことです。本来なら、永遠に生きてくれないものなのか、まずもってなぜ、死が存在するのか？という心の内の叫びがあるかと思います。けれども、「人が必ず死ぬことを疑うなんて、常識を逸している。」と誤ってしまいますから、心の隅のどこかにしまいこんでいるんですね。けれども、そのタブーを明らかにしているのが聖書です。聖書は、「人は元々、死ぬようには定められていない」ことを教えています。

神が初めに人を造られ、人から女を造られた時に、そのエデンと呼ばれる園には、中央に善悪の知識の木といのちの木がありました。善悪の知識の木から取って食べれば、あなたは必ず死ぬ、と神は初めの人、アダムに伝えていました。ところが、妻エバが蛇に惑わされて取って食べ、それを夫にも渡して彼も食べたのです。そして、神は二人をエデンの園から追放したのです。「今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。(創世 3:22)」と言われました。罪のある状態で永遠に生きてしまえば、それは悲惨なことです。罪のあるままの体は、滅ぶようにしないといけないと定められました。

2B 永遠の思い

そのために私たちは、心のどこか奥底で「永遠」という領域があることを知っています。ソロモンが伝道者の書でこう言いました。「3:11 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」その時々、神の与えられたものがあって美しいです。けれども、それ以上に永遠があることを私たちは知っています。すべてのものが滅んでも、神とその国だけは残ることを知っています。

1C 被造物の中

パウロはローマ人へ手紙で、「1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」と言いました。被造物の中に、それを創造した力を見ることができ、被造物が滅び去ってもなお残る神の永遠性を見ることができます。その神が、人の良心に善と悪の区別を与えておられます。

2C 死後の裁き

去年から上映されている「神は死んだのか」の映画の中に、無神論者の教授に対してクリスチャンの学生が問いかける場面があります。「神がおられるならば、なぜこのような悲劇が襲うのか。」と問いかける教授に対して、学生は、「それが悪であること知っている基準はどこから来ているの

ですか？」と反論します。何をもちて正しく、間違っているのか、その基準が不思議にも誰にでも与えられています。誰もが人を殺してはいけないことを知っています。誰もが、盗んではいけないことを知っています。けれども、それは誰から教えられるまでもなく与えられているものです。

そして、これらの悪いことを行ったら、死後に裁きがあるということも薄々分かっています。パウロが続けてこう論じました。「彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら…(ローマ 1:32)」心の奥底で、これをやってはいけないと分かっているのにそれを行っている。けれども、その行なったことに対する報いが、たとえこの地上で裁かれなくても、死後に裁かれるということを知っているのです。

2A 今だけの事を思う愚かさ

モーセは、「**そうして私たちに知恵の心を得させてください。**」と祈りました。わずかな齢を、残り少ない日々を、どのようにして生きるのか、その知恵をくださいと祈っています。その祈りは、死んだ後に自分を裁くことのできる方に対して、地上の報いではなく天の報いを思って、日々を生きていくことに他なりません。神からの褒美を待ち望む生活です。

1B 金持ちの譬え

人は賢く生きても、上手に生きても、死後の命のために計画しているのでなければ、それらの営みはすべて無に帰します。忙しいこと、充実していることが、知恵を持っていることでは決してありません。その計画が頓挫する時、それでも自分を支える霊の命を持っているかが問われます。

イエス様は金持ちの譬えを話されました。「ルカ 12:16-21 ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。』」

いかがでしょうか、彼の事業はとんとん拍子に進みました。そして、倉を大きいのを建てて、穀物や財産を貯めておくことも賢い行動のように見えます。けれども、彼は命を今日にでも取ることのできる方に対して、富を蓄えていなかったのです。今夜、お前から魂が取り去られると言われても、なおのこと残っている富を蓄えないといけないのです。それは、イエス様の言われた、「自分の宝は、天にたくわえなさい。」という言葉であります(マタイ 6:20)。

2B ベルシャツアル

旧約聖書にも、この金持ちのような愚かな者が出てきます。バビロンの最後の王、ベルシャツァ

ルです。「ダニエル 5:1-4 ベルシャツアル王は、千人の貴人たちのために大宴会を催し、その千人の前でぶどう酒を飲んでいました。ベルシャツアルは、ぶどう酒を飲みながら、父ネブカデネザルがエルサレムの宮から取って来た金、銀の器を持って来るように命じた。王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちがその器で飲むためであった。そこで、エルサレムの神の宮の本堂から取って来た金の器が運ばれて来たので、王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちはその器で飲んだ。彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した。」

彼は、酒乱のともなう宴会を開いていました。そして、器をエルサレムの神の宮から持ってきたもので、ぶどう酒を飲んでいました。そして、なんと偶像の神々を賛美していたのです。これらはバビロンの神々です。つまり、ベルシャツアルは、「天と地を造られた神なんか、どうでもいい！私はこのように安心して、楽に暮らしているのだ。私の身近にいる、この心地よい神々がいっしょにいればよいのだ。」と豪語していたのです。けれども、彼はその日のうちに、殺されました。難攻不落と言われていた、バビロンの大きな都が、一夜にして、メディア・ペルシヤ連合軍によって突破されていたのです。

3A 永遠のための投資

私たちは、将来設計をします。それは、とても正しいことです。ある程度の将来設計をしなければ、私たちは自分の生活に責任を持っていません。けれども、先ほどから話していますように、自分が、八十年、九十年生きる中での将来設計です。「ええっ？それでいいんじゃない？」と思われるでしょうか？いいえ、その後の設計をしているのでしょうか？また、八十年、九十年生きることも保証されていません。私たちは、死んだ後に向かって、その永遠に向かって将来設計を立てるのです。神の国に向かって、この世のことを管理します。日々の生活を、永遠の将来設計の上で送っているかどうかであります。

1B 不正の管理人

その知恵を知るのは、イエス様の「不正の管理人」の譬えがもっとも適切です。「ルカ 16:1-8 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がなくて、こじきをするのは恥ずかしい。ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないも

のなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」

ここで不正の管理人がしていることは、何でしょうか？主人に解雇されるのは目に見えています。そこで職を失った後で、自分を雇ってくれるように恩を売っているのです。つまり、ここにある原則は、「将来のこのために、今、あるものを最大限に活用する」ということであります。最後の最後まで不正を行っているのですが、その抜け目のなさに主人はほめたとあります。これは不正をほめたのではなく、将来のことを考えていたからです。

そこでイエス様が 9 節でこう言われます。「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」イエス様は、信仰と今、この世に与えられている富を分けて考えてはいけないことを教えています。「仕事は仕事」ということと、「こちらは教会」と分けて考えてはいけません。今、与えられている仕事の生活をもって天に富を蓄えるのです。

私たちが、どちらを先にしているかで、天に蓄えているかどうか分かります。お祈りをしてから一日を始めているでしょうか？それとも、一日が終わって、それで「ああ、神さまにも仕えないといけない」と思って祈っているのでしょうか？時間の管理です。そして、給料明細が出てきて、「これを主に捧げます」と考えて、十分の一を取り分けるのでしょうか、それとも、「生活をしていて、それでこれだけ余分が出た。それでは献金しよう。」としているのでしょうか？仕事を決めて、あるいは住むところを決めて、生活を整えてから、「それでは教会を探るか、礼拝はどうだろうか」と考えているのでしょうか、それとも礼拝を第一として、その中で主が何をしてくださるか、仕事はどうなるか、学校はどうなるのか、どうなるか、と考えているのでしょうか。神の国のために、こうした具体的な、生活臭の漂う事柄を調整していくのです。

2B 将来の報い

私たちは、この地上で行っていることにしたがって、報いを受けます。「2コリント 5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」しばしば、永遠の命のことを考えたら、「どうせ天国に行けるのだから」と思って、それで今の生活ががんばれなくなるという意見を聞きます。けれども、それは正反対です。永遠の命の報いがあることを知っているからこそ、私たちは今の生活を熱心に主に仕えるために送っていくのです。

使徒パウロは、エペソにいる信者にこう言いました。「エペソ 5:15-16 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。」そうです、今は悪い時代です。だから、将来の設計、すなわち死後という将来の蓄えでこの世の生活を送るのであれば、瞬く間にその悪の誘惑を受けたり、思い煩いによって実を結ばなくなったり、心が頑なになって生ける神から離れてしまいます。

そうではなく、しっかりと心を見張り、その上で、神から与えられた様々な機会を捕えて、主に仕えます。今、悪い時代だからこそ、主が光の子として歩む、あらゆる機会を与えておられます。罪の中に落ち込む誘惑も大きいですが、同時に、聖なる御霊に満たされて、キリストの証しを立てる機会も増えてきているのです。

時は短いです。私たちが自分の日を正しく数えているでしょうか？もしかしたら、すぐに死ぬかもしれません。またすぐにイエス様が戻ってこられるかもしれません。私たちは癌宣告を受けたら、真剣に残された日々を考えます。けれども神を信じる者は、すべてがここにしばらくの間しか残っていないのだ、ということを考えなければいけないことを教えています。「1ペテロ 1:17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。」私たちが残されているのはわずかなのです。主がしなさいと命じられていること、その高尚な召命に応えようではありませんか。

3B 神だけの計画

私たちは心にいろいろな思いがあって、それを実行しようとしています。けれども、今、見てきたように、計画はすべて神が実現されます。「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。(箴言 16:9)」ですから、自分の道は主に明け渡すのです。そして主が展開してくださる、その開かれた道をまっすぐに、堂々と歩き、そして走るとよいのです。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(16:3)」